

食中毒予防

マニュアル

児童発達支援・放課後等デイサービス

あんだんて

目次

食中毒を防ぐ原則とポイント

1. 食中毒を防ぐ原則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 - (1) 食中毒の原因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 - ・ 知っておきたい食中毒の主な原因・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
 - (2) 台所に潜む食中毒の危険・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 - (3) 食中毒予防の原則・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 - ・ 食中毒予防の基本的な方法・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

2. 食中毒を防ぐ6つのポイント
～食品の購入から食べるまでの過程で予防の原則を実践・・・・・・・・ 6
 - (1) 買い物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
 - (2) 食品の保存・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
 - (3) 下準備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
 - (4) 調理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
 - (5) 食事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
 - (6) 残った食品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
 - ・ 食中毒かなと思ったら・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

食中毒を防ぐ原則とポイント

1. 食中毒を防ぐ原則

(1) 食中毒の原因

①食中毒の原因

食中毒を引き起こす主な原因は、「細菌」と「ウイルス」。細菌は温度や湿度などの条件がそろえば食べ物の中で増殖し、その食べ物を食べることにより食中毒を引き起こす。一方、ウイルスは低温や乾燥した環境の中で長く生存する。ウイルスは細菌のように食べ物の中では増殖しないが、食べ物を通じて体内に入ると、人の腸管内で増殖し、食中毒を引き起こす。

②食中毒の発生時期

・細菌が原因となる食中毒は夏場（6月～8月）に多く発生している。その原因となる細菌の代表的なものは腸管出血性大腸菌（O157、O111など）やカンピロバクター、サルモネラ属菌など。食中毒を引き起こす細菌の多くは、室温（約20℃）で活発に増殖し始め、人間や動物の体温ぐらいの温度で増殖のスピードが最も速くなる。例えばO157、O111などの場合、7～8℃ぐらいから増殖し始め、35～40℃で最も増殖が活発になる。また細菌の多くは湿気を好むため、気温が高くなり始め、湿度も高くなる梅雨時には、細菌による食中毒が増える。

・低温や乾燥した環境中で長く生存するウイルスが原因となる食中毒は、冬場（11月～3月）に多く発生している。食中毒の原因となる代表的なウイルスであるノロウイルスは、調理者から食品を介して感染するケースが多く、他に二枚貝に潜んでいることもある。ノロウイルスによる食中毒は、大規模化することが多く、年間の食中毒患者数の5割以上を占めている。

・このほか、毒キノコやフグなどの「自然毒」、アニサキスなどの「寄生虫」なども食中毒の原因となっている。

・このようにさまざまな原因物質によって、食中毒は1年中発生している。

知っておきたい食中毒の主な原因

細菌・ウイルス名	特 徴
腸管出血性大腸菌（0157や0111など）	牛や豚などの家畜の腸の中にある病原大腸菌の一つで、0157や0111などがよく知られている。毒性の強いベロ毒素を出し、腹痛や水のような下痢、出血性の下痢を引き起こす。腸管出血性大腸菌は食肉などに付着し、肉を生で食べたり、加熱不十分な肉を食べたりすることによって食中毒を発症する。乳幼児や高齢者などは重症化し、死に至る場合もある。
カンピロバクター	牛や豚、鶏、猫や犬などの腸の中にある細菌。この細菌が付着した肉を、生で食べたり、加熱不十分で食べたりすることによって、食中毒を発症する。また、吐き気や腹痛、水のような下痢が主な症状で、初期症状では、発熱や頭痛、筋肉痛、倦怠感などがみられる。
サルモネラ属菌	牛や豚、鶏、猫や犬などの腸の中にある細菌。牛・豚・鶏などの食肉、卵などが主な原因食品となるほか、ペットやネズミなどによって、食べ物に菌が付着する場合もある。菌が付着した食べ物を食べてから半日～2日後ぐらいで、激しい胃腸炎、吐き気、おう吐、腹痛、下痢などの症状が現れる。
セレウス菌	河川や土の中など自然界に広く分布している細菌。土がつきやすい穀類や豆類、香辛料などが主な感染源となり、チャーハンやスパゲティ、スープなどが原因食品となっている。毒素の違いによって、症状はおう吐型と下痢型の症状に分けられる。おう吐型は食後1～5時間後、下痢型は食後8～16時間後に症状が現れる。セレウス菌は熱に強く、加熱による殺菌が難しいのが特徴。ただし、少量では発症しないため、菌を増やさないことが予防のポイント。
ブドウ球菌	ブドウ球菌は自然界に広く分布し、人の皮膚やのどもにいる。調理する人の手や指に傷があったり、傷口が化膿したりしている場合は、食品を汚染する確率が高くなる。汚染された食品の中で菌が増殖し、毒素がつくられると食中毒を引き起こす。ブドウ球菌は、酸性やアルカリ性の環境でも増殖し、つくられた毒素は熱にも乾燥にも強いという性質がある。汚染された食物を食べると、3時間前後で急激におう吐や吐き気、下痢などが起こる。
ウエルシュ菌	人や動物の腸管や土壌などに広く生息する細菌。酸素のないところで増殖し、芽胞を作るのが特徴。食後6～18時間で発症し、下痢と腹痛が主な症状として現れる。カレー、煮魚、麺のつけ汁、野菜煮付けなどの煮込み料理が原因食品となることが多く、対策としては、加熱調理した食品の冷却は速やかに行い、室温で長時間放置しないこと。また、食品を再加熱する場合は、十分に加熱して、早めに食べることがポイント。
ノロウイルス	ノロウイルスは手指や食品などを介して、口から体内に入ることによって感染し、腸の中で増殖し、おう吐、下痢、腹痛などを起こす。ノロウイルスに汚染された二枚貝などの食品を十分加熱しないまま食べたり、ノロウイルスに汚染された井戸水などを飲んだりして感染するほか、ノロウイルスに感染した人の手やつば、ふん便、おう吐物などを介して、二次感染するケースもある。

(2) 台所に潜む食中毒の危険

食中毒は、飲食店などの外食で発生しているだけでなく、家庭でも発生している。家庭における食中毒は、症状が軽かったり、家族のうち全員には症状が出なかったりする場合もあるため、食中毒であると認識されないケースも少なくない。

厚生労働省の統計では、家庭での食中毒の発生件数は全体の1割程度となっているが、実際にはもっと多く発生していると推測される。家庭にも食中毒の危険が潜んでいる。

食中毒の原因となる細菌やウイルスは目に見えないため、どこにいるか分からないが、私たちの周りの至るところに存在している可能性がある。

肉や魚などの食材には、細菌やウイルスが付着しているものと考えよう。

また、いろいろな物に触れる自分の手にも、細菌やウイルスが付着していることがある。細菌やウイルスの付着した手を洗わずに食材や食器などを触ると、手を介して、それらにも細菌やウイルスが付着してしまうので、特に注意が必要。

きれいにしているキッチンでも、食中毒の原因となる細菌やウイルスがまったくいないとは限らない。食器用スポンジやふきん、シンク、まな板などは、細菌が付着・増殖したり、ウイルスが付着しやすい場所と言われている。

(3) 食中毒予防の原則

食中毒予防の原則～食中毒の原因菌を「つけない」「増やさない」「やっつける」食中毒の原因ウイルスを「持ち込まない」「ひろげない」「つけない」「やっつける」

食中毒は、その原因となる細菌やウイルスが食べ物に付着し、体内へ侵入することによって発生する。食中毒を防ぐためには、細菌の場合は、細菌を食べ物に「つけない」、食べ物に付着した細菌を「増やさない」、食べ物や調理器具に付着した細菌を「やっつける」という3つのことが原則となる。

また、ウイルスの場合は、食品中では増えないので、「増やさない」は、当てはまらない。ウイルスは、ごくわずかな汚染によって食中毒を起こしてしまう。ウイルスを食品に「つけない」を確実に実行するためには、調理者はもちろんのこと、調理器具、調理環境などの調理場全体がウイルスに汚染されていないことがきわめて重要になる。そのようなウイルスに汚染されていない調理環境をつくるには、調理場内にウイルスを「持ち込まない」、仮に持ち込んだとしても、それを「ひろげない」ことが大切。すなわち、ウイルスによる食中毒を予防するためには、ウイルスを調理場内に「持ち込まない」、食べ物や調理器具にウイルスを「ひろげない」、食べ物にウイルスを「つけない」、付着してしまったウイルスを加熱して「やっつける」という4つのことが原則となる。

食中毒予防の基本的な方法

<p>つけない</p>	<p>【洗う・分ける】</p> <p>手にはさまざまな雑菌が付着している。食中毒の原因菌やウイルスを食べ物に付けないように、次のようなときは、必ず手を洗う。</p> <ul style="list-style-type: none"> *調理を始める前 *生の肉や魚、卵などを取り扱う前後 *調理の途中で、トイレに行ったり、鼻をかんだりした後 *おむつを交換したり、動物に触れたりした後 *食卓につく前 *残った食品を扱う前 <p>また、生の肉や魚などを切ったまな板などの器具から、加熱しないで食べる野菜などへ菌が付着しないように、使用の都度、きれいに洗い、できれば殺菌する。加熱しないで食べるものを先に取り扱うのも1つの方法。焼肉などの場合には、生の肉をつかむ箸と焼けた肉をつかむ箸は別のものにする。食品の保管の際にも、他の食品に付いた細菌が付着しないよう、密封容器に入れたり、ラップをかけたりすることが大事。</p>
<p>増やさない</p>	<p>【低温で保存する】</p> <p>細菌の多くは高温多湿な環境で増殖が活発になるが、10℃以下では増殖がゆっくりとなり、マイナス15℃以下では増殖が停止する。食べ物に付着した菌を増やさないためには、低温で保存することが重要。肉や魚などの生鮮食品や総菜などは、購入後、できるだけ早く冷蔵庫に入れる。なお、冷蔵庫に入れても、細菌はゆっくりと増殖するので、冷蔵庫を過信せず、早めに食べるのが大事。</p>
<p>やっつける</p>	<p>【加熱処理】</p> <p>ほとんどの細菌やウイルスは加熱によって死滅するので、肉や魚はもちろん、野菜なども加熱して食べれば安全。特に肉料理は中心までよく加熱することが大事。中心部を75℃で1分以上加熱することが目安。</p> <p>ふきんやまな板、包丁などの調理器具にも、細菌やウイルスが付着する。特に肉や魚、卵などを使った後の調理器具は、洗剤でよく洗ってから、熱湯をかけて殺菌する。台所用殺菌剤の使用も効果的。</p>

ウイルスの場合は、調理場内へウイルスを「持ち込まない」、「ひろげない」ことが重要。

持ち込まない	<p>【健康状態の把握・管理】</p> <p>調理者等が調理場内にウイルスを持ち込まないためには、ウイルスに感染しない、感染した場合には調理場内に入らないことが必要。そのためには、日頃から健康管理や健康状態の把握を行い、おう吐や下痢の症状がある場合などは調理を行わないようにする。</p>
ひろげない	<p>【手洗い、定期的な消毒・清掃】</p> <p>万が一、ウイルスが調理場内に持ち込まれても、それが食品に付着しなければ食中毒に至ることはないの で、こまめな手洗いを行う。また、ふきんやまな板、 包丁などの調理器具は、洗剤でよく洗った後、熱湯消 毒を定期的に行う。</p>

細菌やウイルスの付着を防ぐ正しい手の洗い方

手に付着した細菌やウイルスは、水で洗うだけでは取り除けない。指の間や爪の中まで、せっけんを使って正しい方法で手を洗う。

(詳しくは、ノロウイルス対応マニュアルの「手洗いの基本」参照)

2. 食中毒を防ぐ6つのポイント

～食品の購入から食べるまでの過程で予防の原則を実践。

食中毒予防は、食品を購入してから、調理して、食べるまでの過程で、どのように、細菌を「つけない」「増やさない」「やっつける」を実践していくかにある。ここでは、「買い物」「家庭での保存」「下準備」「調理」「食事」「残った食品」の6つのポイントで、具体的な方法を紹介していく。

(1) 買い物

- *消費期限を確認する。
- *肉や魚などの生鮮食品や冷凍食品は最後に買う。
- *肉や魚などは汁が他の食品に付かないように分けてビニール袋に入れる。
- *寄り道をしないで、すぐに帰る。

(2) 食品の保存

- *冷蔵や冷凍の必要な食品は、持ち帰ったらすぐに冷蔵庫や冷凍庫に保管する。
- *肉や魚はビニール袋や容器に入れ、他の食品に肉汁などがかからないようにする。
- *肉、魚、卵などを取り扱うときは、取り扱う前と後に必ず手指を洗う。
- *冷蔵庫は10℃以下、冷凍庫は-15℃以下に保つ。
- *冷蔵庫や冷凍庫に詰めすぎない（詰めすぎると冷気の循環が悪くなる）。

(3) 下準備

- *調理の前に石けんで丁寧に手を洗う。
- *野菜などの食材を流水できれいに洗う（カット野菜もよく洗う）。
- *野菜などの食材を流水できれいに洗う（カット野菜もよく洗う）。
- *生肉や魚などの汁が、果物やサラダなど生で食べるものや調理の済んだものにかからないようにする。
- *生肉や魚、卵を触ったら手を洗う。
- *包丁やまな板は肉用、魚用、野菜用と別々にそろえて使い分けると安全。
- *冷凍食品の解凍は冷蔵庫や電子レンジを利用し、自然解凍は避ける。
- *冷凍食品は使う分だけ解凍し、冷凍や解凍を繰り返さない。
- *使用後のふきんやタオルは熱湯で煮沸した後しっかり乾燥させる。
- *使用後の調理器具は洗った後、熱湯をかけて殺菌する（特に生肉や魚を切ったまな板や包丁）。台所用殺菌剤の使用も効果的。

(4) 調理

- *調理の前に手を洗う。
- *肉や魚は十分に加熱。中心部を75℃で1分間以上の加熱が目安。

(5) 食事

- * 食べる前に石けんで手を洗う。
- * 清潔な食器を使う。
- * 作った料理は、長時間、室温に放置しない。

(6) 残った食品

- * 残った食品を扱う前にも手を洗う。
- * 清潔な容器に保存する。
- * 温め直すときも十分に加熱。
- * 時間が経ちすぎたものは思い切って捨てる。
- * ちょっとでもあやしいと思ったら食べずに捨てる。

・食中毒かなと思ったら

おう吐や下痢の症状は、原因物質を排除しようという体の防御反応です。医師の診断を受けずに、市販の下痢止めなどの薬をむやみに服用しないようにし、早めに医師の診断を受けましょう。